

## 『平家物語』における義仲像

川田, 正美 / KAWADA, Masami

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

38

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

1989-09-18

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019581>

# 『平家物語』における義仲像

川 田 正 美

『平家物語』全篇に張りめぐらされた「盛者必衰の理」は、清盛をはじめとする平氏一門はもちろん、源氏の義仲にも、義経にも適用される。しかし『平家』は、「たけき者」清盛の場合は、彼が「遂にはほろび」<sup>(1)</sup>たのは悪行ゆえであると、因果応報観をもって説くのに対し、義仲・義経らの場合には、つとめて客観的記述を施すことによって、彼等の没落がなにに起因するかを、おのずと浮かび上がらせているように思われる。

本論では、義仲と彼をとりまく状況を迎えることによって、その没落要因と義仲その人を、『平家』がどのように捉えたかを、「覚」<sup>(2)</sup>を中心に他本を参看しながら把握してみようと思う。

## 1

木曾義仲が登場するのは、治承五年一月、高倉帝没後の巻六「廻文」であり、ここで信濃における彼の成長の過程から拳兵に至るまでの経緯が記される。

初めに彼の生い立ちが辿られるが、父・義賢を甥（父の兄・義朝の長子）の義平に討たれた義仲としては、義平の弟である頼朝と対立しても不自然ではない関係にあった。しかし、養育に当たった木曾中三兼遠に大志を打ち明ける彼の言葉の中に、源氏内の分裂につながるような狭い敵対意識はみられない。

「兵衛佐頼朝既に謀叛をおこし、東八ヶ国をうちしたがへて、東海道よりのぼり、平家をおひおとさんとすなり。義仲も東山・北陸両道をしたがへて、今一日も先に平家をせめおとし、たとへば、日本国ふたりの將軍といはればや」：①

彼は、既に忽領と目された関東の頼朝に刺激され、北国を率いる自分も「日本国ふたりの將軍といはれ」ることを目指す。ここには源氏再興の担い手としての自覚をもち、その大きな目標に向かって一族と大同団結していこうとするおおらかな義仲像がある。

そしてこうした彼の大望に打てば響くように呼応し、即座に廻文する兼遠の存在がある。彼は良き養い親であったのみならず、義仲のかかる志向を引き出した教育者であると共に、機熟するのを待ち受けた源氏一族の願望をまとめていく組織者でもあるのである。

兼遠にぐせられて、つねは都へのぼり、平家の人々の振舞、ありさまをも見うかぶひけり。…⑧

義仲はこの兼遠に連れられてしばしば上洛し、平氏の動静をうかがっては一門再興の志を育んだ。⑧の記述は「屋・百・平」に無いが、「四」をみると兼遠のかねてからの行動であったことがわかる。<sup>(3)</sup>

この段を他本でみると、「四」では義仲の挙兵の意志④がみえず、「屋・百・平・延」ではそのところが、「常ニハ如何ニモシテ平家ヲ滅テ世ヲ取ハヤナントソ宣ケル」(「屋」)と簡潔に記されるだけである。また兵をかたらうのが兼遠でなく、みずから「木曾イト、意武フナテ」(「屋」)行なっている。更に「中」では、上の四本と同様、義仲が心猛く成長したことを記した後、「をよそはかりごとをめぐらす事も、昔のたむら、としひとにもすぐれ、まさかど、すみともにもこえたりけり」と続け、「さればないくは平家をほろぼして、よをとらんなどぞ申ける」とし、兼遠に八幡殿の御末と「ほめられて、いとど心をこりして、つはものをもよをしけれ……」と記述する。

となると、「屋・百・平・延」の義仲像にはスタートから既に、

後半で自ら「旭將軍」と称して勝手気ままに振る舞い出す義仲像に連絡するような、個人プレイの要素が潜在しているといえるわけで、「中」はこれが徹底された形なのである。

また「屋・百・平・延」の④に該当する部分には、頼朝の名がみえない。そこには、客観情勢とは無関係に自分を押し出していく義仲像があるだけである。

このように古態と目される諸本と比べると、「覚」(「鎌」も)における義仲の登場のさせ方には、彼をとりまく兼遠ら一族の動きを照射し、義仲の頼朝へのライバル意識も付言することによって、後半の浮き上がった行動ゆえに孤立してゆく悲喜劇的造型とは対照的な、協動的・英雄的義仲像がみられるのである。

こうして源氏蜂起を促す廻状を回したところ、彼の地盤の信濃国はもとより、上野国でも多胡郡の武士が付き従ってきた。巻五「富士川」で惨めな敗走をした平氏は、関東の頼朝よりもっと間近い木曾の義仲の挙兵を知って一層動揺し、平氏支流の越後守・城太郎助長に追討に当たさせたが、彼は変死(「嗚声」)。続いて弟の助茂が「四万余騎」を率い、横田河原で戦うが大敗してしまふ(「横田河原合戦」)。

ここで『平家』は、わずか三千余騎の木曾軍が勝てたのは、初めは七手から赤旗を差し上げて、平氏の同心が多いものと敵を安心させ、後では一斉に白旗を差し上げて動揺させる、井上光盛の奇策が大いに力与ったことを記す。

さてこの間、諸国の動きは河内国は謀叛が鎮められたものの、九

州・四国一円が背き出し、全国は大動乱の様相を呈してくる。

このように義仲の挙兵が成功したのは、彼の力もさることながら、頼朝の蜂起を発端とする諸国の平氏離反が大きな潮流となっており、義仲の成功はそうした気運に乗ったものであった。前述のように、最初の勝利が従者の奇襲作戦に依ったものであるにしろ、それは敵が既に反平氏の流れに気押されていたことも影響したものとみられる。やはり義仲の奏功は、そうした客観情勢を抜きにしては語れないことを、『平家』は明らかにしているといえよう。

## 2

寿永二年になると、寺社勢力の南都北嶺、熊野金峰山の僧徒、伊勢の神宮に至るまですっかり平氏に背く有様となり、源氏の勢力はほぼ確定する。そうした中で『平家』は、巻七「清水冠者」に入ると、突然頼朝と義仲の間に「不快の事ありけり」と語り始める。この事情は増補系が詳しい。すなわち、甲斐源氏・武田信光が義仲の子・清水冠者義基を婿に望み拒絶されたことを恨んで頼朝に讒言する。また、義仲の叔父・十郎藏人行家は国一つを所領として所望したところ、頼朝が自力で獲得せよと答えたので、彼は義仲の下に走った。これらのために、頼朝は義仲・行家勢が攻めてくるのを推測して、両者が対陣することになったというのである。

これに対し語り系では、頼朝の立腹した原因が、義仲の行家保護にあるらしいことが義仲の口を通じて暗示され、一方頼朝の口からは、彼に讒言した者の存在が示されている。

いずれにせよ、両者あい向かう緊迫した空気となった中で、義仲

は今井兼平を使者として、義仲自身にはなんら他意無きことを告げる。義仲の弁明は、共通の敵に立ち向かうべき大事なときに内輪もめは無意味ではないかというもので、それを懸命に説く真摯な姿勢は胸を打つものがある。しかし頼朝にしてみれば、彼になんの連絡もなしに恣意的に動き出した義仲という人物に対しては、周囲の情報によって警戒心を懐くのは当然であつたらう。かくて義仲が同胞とみていた頼朝は、彼と齟齬をきたす関係になったことがここで冷厳に示されてくる。

結局義仲は、嫡子・義重を人質として差し出すことで頼朝の誤解を解くことになる。ここには、義仲自身は頼朝と並び称せられているつもりでも、客観的には頼朝が完全に義仲を牛耳っていることも明瞭になるのである。このようにこの段に入ると、義仲は人を疑うことを知らぬお人好しで、政治力にはどうやら乏しいことが明示されてくるのである。

さて義仲は、「東山・北陸両道をしたがへて、五万余騎の勢にて、既に京へせめのぼ」ろうとし、平氏は入念な準備の末、十万余騎の大軍を北陸道へ進発させて一気に決着をつけようとする。「北国下向」では、平軍の路次での強引な物資調達による人民の疲弊が描かれるので、木曾軍が人民の熱い期待を担っているであろうことを相対的に窺わせる。すなわち「東山道は……まいたりたれ共」「東海道は遠江より東はまいらず」「北陸道は若狭より北の兵共一人もまいらず」という不安定な平軍に比べ、火打城に籠った面々は「北陸地方を広範囲にわたって制していたことが推測できる」<sup>(4)</sup>のであ

る。

しかし緒戦の「火打合戦」では、火打城内にいた斉明の内通で敗北を喫してしまふ。斉明は越前は平泉寺の長吏であったが、平泉寺は鳥羽院の治世下で、延暦寺の末寺となったことは巻一「願立」にみえる。平氏と縁の深い叡山の末寺の統括者を、平氏追討の大將にすえたところに、義仲の思わぬ誤算があったといえそうである。<sup>5)</sup>

しかしこのような一時の後退はありながら、次の倶利伽羅戦では義仲は快勝を遂げる。平軍に比して無勢の木曾軍がとった策は、例の奇襲戦法をおいてほかに無い。横田河原戦では井上光盛の策に頼った義仲ではあったが、ここではみずから自信をもって、平軍は平地での対立を避け山中に籠るであろうと推定して、谷に追い落とす奇計を立てている。

「あはや源氏の先陣はむかふたるは。定て大勢にてぞあるらむ。左右なう広みへうち出て、敵は案内者、我等は無案内也、とりこめられては叶まじ。此山は四方巖石であんなれば、搦手よもまはらじ。しばしおりめて馬休ん」(願書)

彼のこの予想はピタリと当たる。続く平氏の言葉には、右の言葉がそっくり繰り返されるからである(こうした叙述方法は語り物特有のものだろうが、「屋」は、この単純な重複を避けるため、初めの義仲の言葉は傍線部だけにとどめている)。

彼のこの戦に賭ける気迫は、戦勝の祈願をすべく羽丹生の陣付近の神社を探すところに現れている。

木曾は羽丹生に陣と(ッ)て、四方をき(ッ)とみまはせば、夏山の嶺のみどりの木の間より、あけの玉墻ほの見えて、かたそぎ作りの社あり。(願書)

それが八幡宮であることを知った義仲は勝利を確信し、願書を奉じたところ山鳩が飛来したのだった。右の傍線部の表現には、なんとしても勝利をものにしようとする気迫が漲っており、これはこの前の「竹生嶋詣」での平経正の態度とは対照的である。経正は、「かゝるみだれのなかにも心をすまし、湖のはたに打出て遙に奥なる嶋をみわたし」竹生島へ渡る。そこで所願成就を期して読経し、僧より渡された琵琶を弾いたところ、白龍が現れたという。彼の場合は、あくまでもひとつの芸能奇瑞譚にとどまっているのである。

さて義仲は、一万余騎を敵の背後に回らせ、夜に入って四方から一時に攻め立て、平氏の全軍を倶利伽羅の谷底に追い落とした。彼は更に氷見の港を渡って苦戦の行家を助け、志保山を越えて能登にまで進出する。

このように義仲は快進撃を続けるが、彼の勝利はこの前の横田河原戦の時と同様、「大軍を擁しながら、一気に敵を攻略する戦意を欠き、いたずらに相手の腹を探ってばかりおるような、怯えきった平軍」<sup>6)</sup>の態度や、この後の「篠原合戦」で「高橋が勢は国々のかり武者なれば、一騎もおちあはず、われ先にとこそ落行けれ」と記されているような、「弱くて役に立たなかつた」<sup>7)</sup>寄せ集めの平軍という敵の弱味も幸いしたのであった。

続く加賀国の篠原では、石橋山戦で頼朝に弓を引いた東国武士らと死闘が繰り広げられるがここでも勝利し、木曾軍は破竹の勢いでいよいよ京に迫っていく。

しかし上洛するには近江国を通らなければならず、叡山の防戦が予想される。そこで越前の国府についた義仲は、俱利伽羅戦の際に願書を書いた大夫房覚明の進言に従い、山門へ蝶状を送ってその協力を求め、これに対し山門では大論議の末、源氏に同心する旨、回答を出す（「木曾山門蝶状」→「返蝶」→「平家山門連署」）。

覚明の蝶状は脅しとすかしの巧みな使い分けによって、山門の決断を引き出したものである。彼の「山門の衆徒は三千人候。必ず一味同心なる事は候はず、皆思々心々に候也」という的確な分析（はたして「返蝶」で「案のごとく……僉議まち／＼也」となる）と巧妙な筆力は、大きくものをいったわけである。（その点、平氏連署の願文は戦績に触れずに、もっぱら頼朝を朝敵と規定して助力を仰ぐだけなので迫力がない。）

しかし覚明が、「若彼悪徒をたすけらるべくは、衆徒にむかつて合戦すべし。若合戦をいたさば、叡岳の滅亡踵をめぐらすべからず」といった威嚇ができたのも、「かけ破てとをらん事はやすけれ」という義仲の自信がバックにあったればこそであろう。だから、増補系では「義仲の軍が以仁王の親王宣旨を奉じたものであることをうた<sup>(8)</sup>」っているのに対し、語り系が「横田河原や北陸合戦を具体的に記<sup>(9)</sup>」し、「うてば必ず伏し、せむれば必ずくだる」といった「義仲中心の戦果を強調<sup>(10)</sup>」しているのは、義仲のそうした自信に呼応し

た書き方といえるのである。山門は、平氏が「悪行法に過<sup>(11)</sup>ぎて」宿運つき<sup>(12)</sup>たこと、また源氏が「度々のいくさに討勝て運命ひらけ」ていることを挙げて源氏に就くのだが、つまりは義仲の嚇々たる戦績による源平勢力の相違を認めたということであろう。その意味からも語り系の叙述は、情勢を的確に記したものといえよう。

巻七における義仲の華々しい動きは、山門への協力とりつけに一歩遅れをとった平氏一門の都落ちを記す冒頭での、佐渡衛門尉重貞の言葉を以て結ばれる。

「木曾既に北国より五万余騎でせめのぼり、比叡山東坂本にみち／＼候。郎等に楯の六郎親忠、手書に大夫房覚明、六千余騎で天台山にきをひのぼり、三千の衆徒皆同心して只今都へ攻入<sup>(13)</sup>る」。〔主上都落〕

### 3

こうして義仲の入京は時間の問題となったわけだが、これを受け入れる都の状態はどうであったか。「還亡」の冒頭は次のように記されている。

これをはじめておやは子におくれ、婦は夫にわかれ、凡遠国近国もさこそはありけめ、京中には家々に門戸を閉て、声々に念仏申おめきさけぶ事おびたゞし。

『平家』はこの章段に至るまでは、もっぱら合戦のもようを描いて

きた。それが平軍の壊滅という形で一段落したところで、この段では一転、その平軍を送り出した京内に視点を移し、更に平氏の暗澹たる将来を、説話を通して暗示しようとするのである。

ところで、「むしろ前の章段の結びのようにも見える」<sup>(12)</sup>右の一文の、「これ」とはなにを指すのであろうか。因みに「屋」は、実盛の死と、この戦いで討死した平氏の武将たちを連記した後、平氏の戦法に対する冷評（「覚」で「実盛」の最終文に当たるところ）を狭み、生き残った飛彈守景家が、嫡子・景高の死を聞いて出家はしたものの、遂に「思死」したことを記し、以上を受けて

始<sup>レ</sup>之親ハ子ヲ討セ子ハ親ヲ討セ妻ハ夫ニ後レ家々ニ喚叫声ヲヒ  
タ、シ

と結んでいる。（〔百・平・竹〕や増補系諸本もほぼ同様である。）

それを、「鎌」がまず平軍戦死者の名寄せを削って、八実盛最期✓を、平氏の戦法への冷評で結ぶ形にする。更に「覚」（但し、大系本校異によれば、龍谷大図書館本、西教寺文庫本、龍門文庫本の三本）は、景家らの出家を削除してしまふ。

従って冒頭文の「これ」は、「覚」とそれ以前の諸本とは受ける内容が異なってくるのである。すなわち「覚」以前の「之」は、平氏軍の敗北による景家らの悲劇を指すのに対し、「覚」の「これ」はもっと広く、北国の戦全般の状況——先述の俱利伽羅戦での雑兵に象徴される、一般庶民をも巻き込んだような——を指し得るものとも解されるのである。

そこで先の冒頭文を改めて比較してみると、「鎌・覚」には「凡遠国近国もさこそありけめ京中には」とか、「門戸を閉て声々に念仏申」とかの句が増補されているのに気づく。すなわち増補系や初期語り系は、平軍の諸人物を列挙することによって、家々の叫喚がいわば平氏の留守家族に限定されてしまうのに対し、「覚」は平氏の固有名詞をいっさい削除しているので、よりトータルな視点で京中の嘆きを捉えようとしているようである。「遠国近国」とは、平氏に限らず庶民一般をさす叙述であろう。そして「門戸を閉て」ひたすら「念仏申」すしかない「家々」には、武家に限らず戦乱におののくそうした庶民一般の姿をもみてよいであろう。

このような庶民の眼に、平氏に代わって二十年ぶりに現われた源氏の白旗はどのように映ったであろうか。義仲ははたして、悪行を重ねた平氏に代わる旗手として都人の期待に応え得たであろうか。義仲の快進撃を描いた巻七から一転して『平家』は、巻八でその行末を追っていく。

貴族は姿を隠し、「平家はおちぬれど、源氏はいまだ入かはらず」「ぬしなき里にぞなりにける」その京に、法皇を守護しながら最初に現われたのは義仲であった（「山門御幸」）。「凡京中には源氏の勢みち／＼」た中、「屋・百」と八坂系を除く諸本は、義仲と行家の鮮やかな装束を記し、彼らの雄姿を一段と映えあるものにして<sup>(13)</sup>いる。

こうした中で法皇は、「平家の一族追討すべきよしを」義仲・行家に命じる。この記述によって読者は、義仲がここで初めて平氏追

討の朝廷からの大義名分を得たことを知る。では、ここまでのそれはなんであったかというに、巻四「源氏揃」で源三位頼政が奉じた、いまは亡き以仁王の令旨でしかなかったわけである。

その義仲は、平氏が安徳帝を伴って離京した後の皇位決定に際しては、三の宮、四の宮の候補に対し、以仁王の遺児・北陸の宮（還俗の宮）を推挙している。このことは語り系では、巻四「通乗之沙汰」に軽く触れられている程度だが、増補系では、彼が俊暁僧正を通じて「此宮の御事偏に寄置せられて議定ニ不及之条、尤不便御事也」（「延」）と、義仲が宮を強硬に推したことで知られる。

平氏が安徳帝を錦の御旗にしたのと同様、義仲にとっては、讃岐守重秀が北陸へ伴ってきた以仁王の若宮を唯一の皇族としてかつぎ出そうとしたのは当然であろうし、叔父・行家が令旨を触れ歩いたこと、兄・仲家が「以仁王挙兵に際し、養父・源三位頼政に殉じ宇治の合戦に討ち死にしている」ことも、以仁王への依存を強めたのである。しかし同じ令旨を得ていた頼朝は、自身が旗上げするに当たっては改めて院宣を福原より得ている（巻五「福原院宣」。また北陸の宮の着位の妥当性については、時忠のその提案に対して平氏間でも、「出家の宮をばいかゞ位にはつけたてまつるべき」と疑義が出されていたし（巻八「名虎」）、だいたい「武士が皇位に口をはさむなどはまったくの常識外れ」であった。このように、朝廷を立てながらことを進めようとする頼朝に対し、義仲のやり方はむしろそれとわたり合う形をとってしまうところに、彼の短兵急さがあった。

続いて『平家』は、今度は勲功を求める義仲らの姿を記していく。

木曾は左馬頭にな（ッ）て、越後国を給はる。其上朝日の將軍といふ院宣を下されけり。……木曾は越後をきらへば、伊予をたぶ。

……（「名虎」）

傍線部は「屋・百」に無いが、「闘」および「平・鎌・覚」にみえるものである。「延」では義仲と行家の所領要求に対して

今日行家義仲等聴院昇殿本、候上北面けり、此条雖非可驚官位俸禄已如存歟、奢れる心は人として皆存せる事なれとも今称勲功、日々重畳す、尤頼朝之所存を可思慮歟とそ、人々申あわれける、

と、世上の批判を加えている。

続く『平家』の記事は、頼朝が征夷大將軍の院宣を「あながら」にして受けるところである（「征夷將軍院宣」。一門の武將を総動員してその勢力を誇示した頼朝は、院側の使者・中原泰定に新たな院宣を要請している。

「平家頼朝が威勢におそれて宮をおち、その跡に木曾の冠者、十郎藏人うちいりて、わが高名がほに官加階をおもふ様になり、おもふさまに国をきらひ申条、奇怪也。……いそぎ追討すべきよしの院宣を給はるべう候」。

ここには、平氏を都から追い出した当の義仲らに対する評価はみんなもみられない。「西国の平氏を逐わず、不案内な八都に拘泥していた義仲」らに対して、早くも頼朝が彼を有害と判断したことが示されている。

同時に、「法皇も御感ありけり」というほどの使者に対する手厚い接待ぶり（これが実はきわめて政治的なものであったのだが）が、院側の反撥をかうような義仲の態度と好対照をなしていることも見落せない。史実では約十年も後のことをここに置いたのは、そうした都での義仲の態度と対比させる意図があったろう。

こうして院からも、頼朝からも見離されてきた義仲に対して、『平家』は、これまで抑えてきた感情を一気に爆発させるかのようになり、彼への批判を奔らせる。しかし、その言い方は次の如きものである。

兵衛佐はかうこそゆゝしくおはしけるに、木曾の左馬頭、都の守護してありけるが、たちゐの振舞の無骨さ、物いふ詞つゞぎのたくななることかぎりなし。ことほりかな、二歳より信濃国木曾といふ山里に、三十まですみなれたりしかば、争かしるべき。

〔猫間〕

いったい『平家』の作者は、人を批判するに当たっては優れた者と比較し、しかも表面的にかいなですることが多い（例えば、宗盛と重盛との比較）。右の批判も、これまでに描いてきたような義仲の政治的視野の欠如という点にはまったく触れず、ただ、言動が野鄙

で無教養な点だけを挙げている。

その好例として示されるのが「猫間」の段である。しかし、ここに描かれた猫間中納言光高をシラけさす義仲の無作法や、牛車で出仕する際の失態は、貴族のもつ都会的尺度に当てはめたために嘲笑されているのであって、作者が揶揄しようとする意図とは裏腹に、その侮蔑の眼が「朴訥粗野で虚飾もてらいもない人間義仲」をかえってナマに捉えているのもまた事実である。（諸本を比較すると、語り系は増補系にみられたとげとげしさを払拭し、人のよい義仲像に戯画化していることが分かる。）つまり義仲の器量の無さという点を、作者は短所として挙げつらおうとしたにも拘わらず、結果としてはむしろそれが長所であるかのように、時代を越えて読者の眼には映じてくるのである。

とはいえ、この光高とのやりとりや、この後の牛車の乗り方も知らぬ笑話によって、義仲は都ではおよそ社会的な見識をもち合わせぬ、武骨一点ばりの人物でしかないことが、都人の眼を通じて（其外ヲカシキ事共多カリシカ共、恐テ人不申（一屋））判明したことは確かである。しかも義仲らが入京した養和の時期は、『方丈記』にも記されている通りのすさまじい飢饉にぶつかっており、「鼓判官」の冒頭に記されている木曾軍の略奪・乱暴もそれが背景にあつたらしい。当然、都人の反撥は大きく、「平家の都におはせし時は、六波羅殿とて、たゞおほかたおそろしかりしばかり也。衣裳をはぐまではなかりし物を、平家に源氏かへおとりしたり」と、この点でも義仲は平氏以上に評判を落としたのであった。

こうして、都ですっかり不評を買った義仲が更に苦況に追い込まれたのは、肝心の戦鬪においても黒星を重ね出したことであった。九州の宇佐から太宰府、山鹿城から瀬戸内海へと逃れ出た平氏が、讃岐の屋島でようやく落ち着き、反撃に転じたからである。山陽・南海両国を従えた平氏に義仲は討手を差し向けるが、備中国の水島で教経らに大敗を喫してしまふ。北陸での騎馬戦では華々しく進軍した義仲も、水軍を得意とする平氏相手では勝手が違ったわけである。

おまけに頼朝と不和となり義仲の下に走った（巻七「清水冠者」）叔父・行家が、今度は義仲と対立し、義仲のことを法皇に讒言するという、足元からも火がつく事態となった（「室山」）。体制を建て直し、屋島を攻めようとしていた義仲は、このことを在京の樋口兼光から聞き、あわてて京へ引き返す。義仲と行き違いに西下した行家は「木曾と中なをりせんとやおもひけむ」、播磨国の室山に五陣を張った知盛らと対戦するが、彼も敗走して河内国に退く。義仲に続く行家の敗北は、平氏をいよいよ勢いづかせる結果となった。

史実によればこの間、義仲の動きに不満をもった法皇は頼朝と結託し、彼の討滅をはかっている。すなわち法皇は、義仲が平氏討伐に赴いた留守中、いわゆる「十月宣旨」を行ない、頼朝に東海・東山両道の行政権を認めた（『百鍊抄』）。それどころか義仲の根拠地たる北陸道までが頼朝の支配下におかれるという情報が伝わった（これは法皇がためらい実現しなかったが）ために、あわてて帰洛した

というのが、彼が「夜を日につるで馳上」った（「室山」冒頭）真相である。

しかし『平家』は、こうした権力者同士の裏取引をことさら暴こうとはしていない。後に義経が放逐された理由を、あくまでも本人の器の無さと、梶原の頼朝への讒言に求めたのと同様に、義仲が四面楚歌に陥った原因もまた、本人の都会感覚の欠如と、行家や後に登場する知康らの法皇への讒言にあったとするのである。

『平家』が当時の政治・社会情勢を事件の背景として説明する形を容易にとらないことは、先に養和の飢饉を特に採り上げなかったところにも言えた。『平家』は、義仲勢の略奪が飢餓という切羽つまった事情に因るものでなしに、彼等の乱暴それ自体が存在したように描く。そしてそれが、人心の離反を招いた原因であるとするのである。本論冒頭にふれた『平家』の因果応報観は、義仲の場合はここにのみあてはめられているといえる。（『平家』が飢餓を描かなかったのは、作者の飽腹感ゆえとする指摘もあるが、少なくともこの場合は、因果を基軸とした物語の論理には不要であったからともみられよう。）

さて、このような木曾軍の乱暴にたまりかね、法皇は義仲に部下の狼藉とり鎮めの命を下す（「鼓判官」）。その使者は鼓に堪能な巻岐判官知康という者であったが、義仲は「猫間」の時と同様、「抑わどのを鼓判官といふは、よろづの人にうたれたうか、はられたるか」などとズケズケ言うので、呆れた彼は、逆に法皇に彼の追討を建言する。

義仲の形勢はいよいよ悪く、

木曾左馬頭、院の御気色あしうなると聞えしかば、はじめは木曾にしたがふたりける五畿内の兵ども、皆そむるて院方へまいる。信濃源氏村上の三郎判官代、是も木曾をそむるて法皇へまいるり。

という状態になつてしまふ。危機を感じた今井兼平は降伏を勧めるが、義仲は

「……いまだ敵にうしろを見せず、たとひく十善帝王にてましますとも、甲をぬぎ、弓をはづいて降人にはえこそまいるまじけれ」。

と拒否し、部下の掠奪は軍に不可欠の行為だと、その正当性を主張する。

ここに、人心の疲弊を意に介さぬ彼の身勝手な主張が端的にみられるが、一方、これを討とうとする朝廷の側も、その行動は貴族階級の保身のためでしかなかった。寄せ集めの軍勢にすぎない官軍が、法住寺戦でぶざまな敗北を喫したのは当然だが、彼等公卿の敗退ぶりが、知康をはじめとして風刺的に描かれているのも、鹿谷事件のときと同様、しよせんは民衆に背を向けた者同士の争いからくる虚しさによるものであろう。

この合戦で、法皇は五条内裏に、天皇は閑院殿に押し籠められ、明雲、円慶といった高僧が斬殺されるに至った。

是「明雲らの死」を見る人涙をながさずといふことなし。木曾其勢七千余騎、馬の鼻を東へむけ、天も響き大地もゆるぐ程に、時をぞ三々度つくりける。京中又さはぎあへり。但是は悦の時とぞ聞えし。〔法住寺合戦〕

義仲と人民との遊離は決定的となった。右、後半の記述には、京市民が「また戦か」と誤解するのをよそに、喜びの勝ち鬨をあげる木曾軍の独善的な姿が映し出されている。

奢る平氏を追い払った義仲も、権力を手中にすれば、貴族との交縁（関白基房の娘を妻帯）をする一方、公卿殿上人四十九人の官職を停めるなど、その行動は「平家の悪行には超過せり」と評されるほどであった。

## 5

手がつけられなくなった義仲の暴状を鎮めるべく、鎌倉の頼朝は、弟の蒲冠者範頼と九郎冠者義経を大將軍とした軍を発向させる。法住寺戦の際、「頼朝が帰きかむ処もあり」（「鼓判官」）と頼朝の聞えを気にした義仲だったが、その関東からも攻められる羽目になった彼は、屋島の平氏に講和を呼びかけたが、ある程度力を回復してきていた平氏はこれを断わっている。義父の基房から諫められ、さすがの義仲も貴族の復位を認めはしたが、世の不安さは変わらぬまま迎えた寿永三年の一月、関東の大軍が都に迫ってきた。平氏追討に出ようとした矢先である（巻九「生ずきの沙汰」）。

かつて入京の際には五万余騎を誇った義仲軍も、対平氏戦や度重

なる離反で激滅していた。六万余騎の関東軍に対し、「折ふしせいもなか」った木曾軍は、勢田に八百余騎、宇治に五百余騎、一口に三百余騎を当てるのが精一杯である。(増補系は、更に行家追討のため河内国に五百余騎を当てる。)その上、宇治・勢田の橋板を引き外して防ごうとしたが、勢いに乗る関東軍は、互いに競い合いながら一気に渡河を執行してしまう(「宇治川先陣」)。

こうして、最後の戦(義仲からみれば「最後の軍」は法住寺戦であつたが)に敗れた義仲のあがきが、「河原合戦」に描かれる。

〔覚〕は、

①…義仲院参不能↓六条高倉の女房との別れ↓河原合戦(Ⅰ) ↓

②…義経院参 ↓

③…義仲、西国行を断念↓河原合戦(Ⅱ) ↓

というように、義仲が院と河原との間を右往左往する①と③の間に、義経らが派手やかに法皇の御前に居並ぶ場面②を入れる構成なので、義仲のみじめさが一段と対照的に映ることになる。

こうした中でひととき目を引く義仲の行動は、六条高倉に住む女房のもとに立ち寄るところである。愛する女房と最後の名残りを惜しむことは平氏の通盛や重衡にもみられるのだが、武骨一徹の彼が、窮迫した状況のさなかにありながらふと垣間見せる人間性が、平氏の公達とは異なる感銘を呼ぶ。

しかし一歩見方を変えれば、この切迫した情勢下でこのような逢瀬にうつつを抜かしていることは、木曾軍の統領としての立場と状

況が自覚されていないということであり、だからこそ越後中太家光のように、死をもってそれを悟らせようとする従者までが登場したのだといえよう。

この△女房との別れ▽は、「四」では前述の◎の部に入っている。そして「四」も「覚」同様、この後の義仲は、那波広純を先頭に六条河原に向かっているので、「覚」はここまでの場面をそっくり②の前にもっていったことになる。すなわち「覚」では、①での木曾軍の動きは「木曾はけふをかぎりとなすかへば、東国のせいはいわれうつとらんとぞすゝみける」で中断したまま、②の△義経院参▽に転換することになり、それを通過して再び義仲が登場し、「数万騎の大勢のなかへおめいてかけいる」◎の場面となるのである。

ところで「覚」の義仲は、②の△義経院参▽があつた為、やむなく◎で、法皇の連れ出しを断念したように書かれている。

木曾はもしの事あらば、法皇をとりまいらせて西国へ落くだり、平家とひとつにならんとて、力者廿人そろへても(ッ)たりけれど、御所には九郎義経はせまい(ッ)て守護したてまつる由聞えしかば、さらばとて、数万騎の大勢のなかへおめひてかけいる。

ところが①の△義仲院参▽をみると「最後のいとま」とあるので、この時点で既に法皇連れ出しを断念していたかのようにもとれる。①と②が逆の順序ならすっきりするのだが、このようなやや通りの悪い叙述になつているのも、もともとが本章段は②と△①+

◎Vの二段構成であったのを、①を◎から切り離し、②の前に置く三段構成に改変したことの残影ではあるまいか。

いづれにせよ「覚」では、義仲が家光の死に発奮して敵軍に駆け入ったものの、既に義経と院との結託ははかられており、義仲は院に後髪を引かれながら都落ちを余儀なくされるといふ叙述になっている。ということは、今わの際での女房との逢瀬の、まさにその間にこそ義仲は義経に出遅れた——「覚」の再構成は、そのような意図の下になされているとみられよう。

こうして義仲は敗戦の道に転落してゆくのだが、これまで都人の視点に立って嘲笑し続けてきた作者は、このあたりから一転して義仲の人間性を描き出してゆく。前引の如く、独り敵中に割って入るような絶望的状况の中で、涙を流しながら瀬戸へ遣わした乳母子・今井兼平を気遣い、虚空に刀を振り回す赤裸々な姿に接したとき、そこに義仲の真実を見出すからである。

主従たった七騎で、四の宮河原を経て都落ちする際、連れてきた便女の一人である巴に対し、義仲は

「おのれはとう／＼おんななればいづちへもゆけ。我は打死せんと思ふなり。もし人手にかゝらば自害をせんずれば、木曾殿の最後のいくさに女をぐせられたりけりな(ン)どいはれん事もしかるべからず」

と言って、戦場から去らせようとする(「木曾最期」)。

ここでの、わが身の終焉に汚点を残したくないという理由づけは口実であろう。ここは、敗北が決定的になったいま、いくら男勝りの働きをしても、しよせんは女である巴を死の道連れにはさせまいという、義仲の配慮の現われとみられよう。

このように武骨一徹のようでも義仲は、時折女性への愛情を示すのだが、先の「河原合戦」での行動は、窮迫した状況のさなかでありながら垣間見せた人間性の現われとして評価できる反面、切迫した情勢を弁えぬものとして従者の諫死を呼ぶ性質のものであった。しかしここでは、万事休した末での諦念が生んだ静かな言動であり、語り系作者は、いまわの際で示したその行為を真実味溢れる人間性の発露とみたのであろう。

増補系諸本では、巴の剛勇ぶりが描かれた後は、

云云云云「云云女武者被討為落為不知云云行方」(四)

と、彼女は忽然と姿をくらましていて(「闘・盛」)のように後日談を記すのもあるが)、義仲の戦場離脱の勧めも、それに抗する巴の姿もみえないのである。

こうして戦場から巴をも去らせた義仲は、今井兼平とただの二人になってしまふ。

「日来はなにもおほえぬ鎧が、けふはおもうな(ッ)たるぞや」

重さとは相対的なものだが、何キロもある鎧は、並の人間にとつ

てはそれ自体が重く、武具であつたらう。それを、それまでの義仲は負担に感じなかったという事は、彼の肉体が頑健であつたばかりではない。北陸戦での連勝は、彼の躍動がその重さをもつたものもしいなかつたのだらうし、法住寺での防戦でも連日の気持ちの張りがそれを感じさせなかつたのに違いない。しかしその彼が、都人の嘲笑を浴び、政治の駆け引きに疲れ果て、追い詰められたところでふと肩に感じた鎧の重さ。先の言葉は、「日頃はなにもおぼえぬ」ものが、ある契機を経て実体そのものの感覚を得る、という真理を突いたところに意義があらう。

ボロボロに傷ついた義仲の脳裏に去来したものは、青き山々とそこを共に駆け巡つた今井兼平だけであつたのだらう。自害も果たせず、その竹馬の友を案じて振り返つた義仲の首を一本の矢が射抜き、彼の生涯はあつてなく閉じられる。

## 6

この「木曾最期」の一章は、稀にみる彫琢された形象をもつ場面として世評高いが、結局悲話にとどまつているのはなぜだらうか。それは彼の死が、歴史的にみてなら明日への跳躍台として刻印され得るものでなかつたからであらう。木曾義仲という名が表わす通り、終始彼は一人の野人にすぎなかつた。

北陸での生き生きとした動きは、そこが彼の生まれながらの舞台だつたからであり、兼平、覚明という良き従者と一体になつて進むその雄姿には、叙事詩的英雄の面影をもみてとれよう。

しかしその彼が、日向の臭いを発散させたまま、四百年の歴史を

もつ都に飛び込んだところから悲喜劇が生まれてくる。

赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧きて、いか物づくりの太刀をはき、きりふの矢をひ、しげ藤の弓脇にはさみ、甲をばぬぎたかひもにかけ……（巻八「山門御幸」）

という出立ちも、陽光のふりそそぐ山々を背景としてこそ映えるものであつた。鎧を脱ぎ、「布衣とり、装束烏帽子ぎはより指貫のすそまで、まことにかたくな」（巻九「猫間」）な衣装をまとつたところで、野鄙な肉体は変わりようがなかつたわけである。

義仲の場合、田舎者が頭に描いていた都のイメージを、そのまま現実に持ち込もうとしたところにかんともし難い弱点があつた。ひとは、まだ見ぬものに対する固定観念があつたにしても、現実のそれを目にするこゝろによってそれを修正し順応させていくものだが、義仲の場合それがまつたくなかつた。彼には都への憧憬はあつても、頼朝のような伝統への畏敬は皆無であつた。

また彼が力説した武士の論理（「鼓判官」）も、無抵抗な庶民（彼等の支持がよりどころであつたのに）に及ぼされては反撥を買うばかりである。

こうして、力づくだけが取り柄の義仲が平氏打倒の役割を終えたときには、もはや無用どころか害毒を及ぼしかねないと判断され、抹殺の憂き目にあうのは理の当然であつた。かくて政治的に無能な義仲は、都人から嘲笑・排斥され続け、身心はズタズタになる。

義仲の軌跡を振り返るとき、前半の華やかさに比べ、後半の彼に

は空しさだけが残る。前述のように、彼の野人性がなんのためらいもなく都に持ち込まれたそこには、両者の軋轢以外なものも生じていないからである。

しかし義仲の動きを追うとき、そこには地方と都会をめぐっての文化、言語、人間の在り方について、もっと深められてよい問題が内在しているように思われる。

「猫間」では、使者の猫間中納言は、義仲に用件を言わずじまいで帰ってしまい、彼が田舎者であることを、為政者として失格の理由にしている。また後半の、牛車の乗り降りの仕方も知らなかった話にしても、義仲自身は彼なりに神経を使っているのだが、その言動（方言が使われている）は都人から笑い飛ばされてしまう。ここには、田舎者は都会の常識を知らぬから駄目だという、都本位の考え方がまかり通っており、都会が地方を塗り込めていく方向しかみられない。例えば『今昔物語集』の如き、辺境に対するあくなき興味と瞳目する眼が、ここでいまい少し『平家』にあったならば、新たな人間像の拡がりを得たのでは、と思わせるのである。

もちろん、そのためには義仲は役不足であったわけで、彼のストレートな都への介入とそれに対する都人の感情は、新たな可能性を笑いや反撥と共に吹き飛ばしてしまった。都に在した二ヶ月の間、義仲の存在意義は平氏を追い払ったことだけであり、あとはお互いにも生み出し得ず散ってしまったところに、言いしれぬ空虚と悲哀が漂うわけである。

「さてこそ粟津のいくさはなかりけれ」——義仲物語を締め括るこの一句は、そうした空しく哀しい義仲像を端的に表象したものと

いえるだろう。

注

- (1) 卷一「祇園精舎」。以下引用は特に断わらぬ限り、日本古典文学大系本による。
- (2) 本論で用いる諸本の略号は、次の通りである。  
〔鬪〕源平鬪諍録 〔四〕四部合戦状本  
〔延〕延慶本 〔盛〕源平盛衰記  
〔屋〕屋代本 〔平〕平松家本 〔竹〕竹柏園本 〔鎌〕鎌倉本  
〔覚〕覚一本 〔百〕百二十句本 〔中〕中院本  
成人の後、<sup>て</sup>引試<sup>サツト</sup> 平家<sup>キヤク</sup>忍<sup>ニ</sup>度々<sup>ドド</sup>上<sup>ウヘ</sup> 京平家<sup>キヤウヘイキヤ</sup>運盛<sup>ウンセイ</sup> 不<sup>フ</sup>及<sup>キ</sup>  
子細<sup>コトワザ</sup>
- (3) 大系本補注
- (4) 『平家物語論考』（私家版）巻七
- (5) 佐々木八郎『平家物語評講』下巻
- (6) 大系本頭注
- (7) 水原一『平家物語』中巻／＼新潮日本古典集成
- (8) 注(5)に同じ。
- (9) 富倉徳次郎『平家物語全注釈』中巻
- (10) これらの武装姿が事実を曲げていることは、『評講』（注(6)）に『吉記』を引いての指摘がある。
- (11) 『平家物語研究事典』
- (12) 上横手雅敬『平家物語の虚構と真実』
- (13) 注(14)に同じ。

- (17) 拙稿「平家物語における頼朝像」(『日本文学誌要』第31号)
- (18) 『吾妻鏡』によれば建久三年七月のことであること、先学(注(6)、(12))に指摘がある。
- (19) 注(6)に同じ。
- (20) 『平家物語論考』卷八
- (21) 石母田正『平家物語』(岩波新書)など
- (22) 『全注釈』(注(12))による。ほかに、木下順二『平家物語を読む』など。
- (23) 注(12)、(15)、(21)などの指摘による。
- (24) 益田勝実「飢えたる戦士」(『火山列島の思想』)
- (25) 『評講』の記述に負う。

(一九六六年卒)